

「誠心誠意」をもって臨む



な お た か
直 孝

つ じ
辻

きたみ
北見市長(北海道)



市内小学生を対象としたカーリング体験会の様子

オホーツクの中核都市「北見」

北海道東部に位置する北見市は、東西に延びる道路の距離が、東京駅から箱根までの距離に相当する約110km、面積が東京都の約65%に相当する1427.41kmあり、全国4番目の広さを有するオホーツク圏最大の都市です。

平成18年3月5日に、北見市、端野町、常呂町、留辺蘂町が合併し、新「北見市」が誕生しました。

石北峠からオホーツク海に至る広大な面積を有するとともに、河川の流域沿いに市街地と農地が形成された都市の利便性と豊かな自然環境を併せ持つまちであり、肥沃な土壌に育まれた農作物やオホーツク海域の新鮮な海産物が豊富に集まるオホーツクの台所です。

日本一の生産量を誇るたまねぎや、かつて世界シェア70%を占めていた北見ハッカ、オホーツク海とサロマ湖の豊富な栄養で育ったホタテ、そして人口当たりの店舗数が全道一を誇る「焼き肉のまち」としても有名で、市民には焼き肉の文

化が根付き、多くの観光客にも食の魅力を楽しんでいただいております。

そして、北見市といえればカーリングを連想される方もいらっしゃるかと思いますが、合併前の常呂町を含め、これまで多くのオリンピック選手を輩出してきました。現在は「カーリングシティ北見」として2カ所の通年型カーリングホールを有しており、合宿誘致や体験型観光などさらなる交流人口の拡大はもとより、小中学校の授業や初心者利用など、カーリング競技の裾野拡大も目指し、地域資源であるカーリングのさらなる持続的発展と地域の活性化に向け取り組んでおります。

また、本市では転居や婚姻などのライフイベントに付随して発生するさまざまな手続きについて、窓口を移動することなくその場で手続きが終わる「ワンストップ窓口」と、来庁者の書く手間を省略する「書かない窓口」を実現し、これらを組み合わせ「書かないワンストップ窓口」に取り組みんでいます。この取り組みを含む窓口業務改革は、職員の知恵と熱意を結集させ、10年以上かけて取り組んできたものであり、住民の利便性の向上と職員の業務の効率化の両方の観点において、国などから高い評価を頂いております。

日々の生活からの学び

私は、71歳を迎えましたが、これまでの



書かないワンストップ窓口

人生を振り返りますと、「仕事」を中心とした生活であったと思います。昭和28年7月、商店を営んでいた両親の下に、男ばかり2人兄弟の長男として、後に新「北見市」となる常呂町で生まれました。母親は愛情深く、父親は子煩悩で、小中高校と常呂町で暮らしました。その頃はスーパーもなく、店はそれなりに繁盛していましたが、それでも生活は決して楽ではなく、家業や家事の手伝いをしながら学校に通う毎日を送っていました。大学は札幌に進学させてもらいましたが、生活費を稼ぐために倉庫の管理や塾講師、引越越し業者などいろいろなアルバイトを経験しました。また、大学4年



日本一の生産量を誇り全国に届けられているたまねぎ



日本有数の水揚げ量を誇るホタテ

生の時に、北海道と東北で経済学などを学ぶ大学生が集う学術大会があり、その実行委員長を務めたことはとても貴重な経験となりました。

こうしたさまざまな経験の中には多くの失敗もありましたが、私はいつも人との関わりにおいて常に真摯^{しんしん}に向き合い、行動することを心掛けてきました。

仕事は信頼関係を築くことが大切

私は、平成27年9月に北見市長に就任しましたが、昭和51年5月に旧北見市に奉職してからの39年間余りは職員として勤務していました。その職員時代の平成18年に北見市から十勝の中川郡池田町をつなぐ鉄道路線「ふるさと銀河線」の廃線に伴う清算業務の任を受けました。ふるさと銀河線は旧

国鉄が運営し、後にJR北海道に引き継がれた鉄道路線「池北線」を平成元年に道内では唯一第三セクターである北海道ちほく高原鉄道株式会社が引き継ぎ、当時日本の第三セクター鉄道としては最長の営業距離140kmを持つ路線でありました。しかし、人口減少や産業構造の変化などにより、旅客需要が減少し、平成2年度には年間100万人を誇った旅客数は減少に転じ、平成17年3月、取締役会で廃線が決定されました。

私の仕事は、鉄道会社が保有している沿線1市6町にまたがる鉄道敷地や鉄道施設をはじめとした残余財産の処分を2年間という短期間で進めることでした。会社清算に向けての業務は多岐にわたり、その交渉に当たっては、沿線自治体の首長が相手でしたので、直接会う時間をつくってもらうことも大変でした。毎日、沿線自治体をひたすら回り、時間の許す限り話をさせていただきました。自治体間の均衡を取りながらの調整は困難の連続でしたが、諦めず、粘り強く取り組んだ結果、2年を待たずに業務を完遂することができました。一緒に取り組んだ仲間にも心から感謝をしています。

私は、この仕事を通じて、「誠心誠意」事に当たることが人とのつな

がりを深め、信頼関係を築き上げる力となることを学び、真摯な姿勢で心から思いを伝えることで相手も心を開き、双方にとってより良い解決策にたどり着くことができると感じました。今は市長という立場ですが、どんな仕事に対しても「誠心誠意」をもって臨むことが大変重要であると改めて実感しています。これからも今できる最善の努力を重ね、一步一步、確実に市政を推進してまいります。



職員と共に市内の夏祭りに参加する筆者（前列右）